広報 すぎなみ
Suginami
支えあい共につくる
安全で活力あるみどりの住宅都市 杉並
11/15
令和元年（2019年）
No.2266

自信につながる義足を作りたい。

義足で人生の新たな一歩を踏み出す。そんな人々のスタートを、そして歩みを、技術と経験と懐の深さで力強く支えている、義肢装具士の臼井二美男さん。35年間、障害と向き合う人のそばに寄り添い続ける臼井さんの義足作りへの熱意。日本におけるスポーツ用義足製作の第一人者として、パラリンピックに向けて何を思うのか。義足製作の現場を訪ねてお話を伺いました。

特集
すぎなみビト
臼井 二美男

Contents ―主な記事―

5｜犯罪被害者総合支援窓口を開設しています　8｜12月4日～10日は人権週間です　16｜進めよう！　住みよいまちのみちづくり！

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ｜ 3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通） ｜ 区ホームページ：https://www.city.suginami.tokyo.jp/ ｜ 発行：杉並区 ｜ 編集：広報課

広報すぎなみは月２回（１・15日）発行。新聞折り込みのほか、区の施設・駅・コンビニエンスストアなどの広報スタンドに設置しています。

走れた瞬間、涙があふれる・・・そんな 場面を何度も見てきました。

すぎなみビト × interview

臼井二美男

プロフィール：臼井二美男（うすい・ふみお） 群馬県出身、杉並区阿佐谷在住。大学進学を機に上京し、28歳で鉄道弘済会に就職。義肢装具士として生活用の義足を作る傍ら、独自にスポーツ用義足の製作も始め、シドニー2000パラリンピック競技大会で注目を集める。多くのアスリートが信頼を寄せ、パラリンピックでは選手に同行も。現在は東京2020大会に向けてメイド・イン・ジャパンのスポーツ用義足の開発にも尽力している。

―たくさんの義足が並んでいますが、こんなにも種類があることに驚きました。

大きく分けると生活用とスポーツ用の2種類ですが、切断レベルでさらに細かく種類が分かれます。指先だけの義足もあれば、足首から下、膝下、太腿や鼠蹊（そけい）部から下のものもある。型もさまざまですし、最近は電動アシスト付きの義足もあるんですよ。素材によっても違ってきますし、義足といっても本当に多種多様です。義肢装具士は義手も作りますし、コルセットやインソールといった「装具」を作る仕事も多いです。そして義足にしても装具にしても、僕がこの世界に入った35年前に比べてずいぶん進化しましたね。

―そもそも、なぜ臼井さんは義肢装具士の道を志したのですか？

僕はこの仕事に就いたのは遅いんですよ。大学進学で東京へ出てきたのが18歳。大学中退後、アルバイトでいろんな仕事を経験したけれど、なかなか「これだ」と思う仕事に出会えなかった。でも28歳の時、職安帰りに近くの職業訓練校の看板をふと見たら「義肢」という文字が目に飛び込んできて。同時に、小学6年生の時の担任の先生が義足を履いていたことを思い出しまして。当時、先生は20代で、担任になった後に脚の病気が発覚したのですが、義足を着けてまた学校に戻って来てくれて。「触ってみていいよ」と言うからズボンの上から触れてみたら固かった。なぜだか分からないけれど、その手の感触をずっと覚えていて、義肢製作という仕事を身近に感じ、一瞬で興味を持ちました。

―小学生の時の記憶が、義肢装具士を目指すきっかけになったのですね。

そのまま訓練校の門をたたき、縁あって現在の会社で見習いを始めました。最初の2年間は仕上げ作業ばかりで、3年目に初めて足の石こうをとる仕事をさせてもらい、以降、数えたことはないけれど500人近くの義足を作ってきたと思います。義足作りは、技術はもちろん必要だけれど、実践ありきの部分も大きい。なぜかというと、同じ足の人間はいませんから。完全にオーダーメードのものなので、数値や理屈だけではうまくいかないことが多いんです。

使う人の好みでデコレーションした義足。「義足を人に見せるのは勇気がいるけれど、見せることはその人の自信につながる」と臼井さん。

―義足作りでは、どのような点が特に重要になってくるのでしょうか？

適合感というのでしょうか、義足を着用した本人が「合っている」と感じることが大切です。計算上はぴったりでも、感じ方や好みは人それぞれ違うので、それも踏まえてフィットしなければならない。そういった適合感が、未熟だった頃は僕もなかなか分からなくて。経験を積みながら、相手が求めるものが分かるようになってくると、それも考慮して作ったりもします。とはいえ今でも、「どうやって合わせようか」と悩んでしまうこともあります。

―義足を作り続けるその原動力は、どこにあるのでしょうか？

それはやはり、義足を履いた人が喜んでくれる姿です。足の切断というのは一生を左右することであり、想像できないほど大きな失望を抱える要因になると思うんです。でも、その大きな失望の中で義足を履き、「これで仕事に戻れる」「また学校へ行ける」という言葉が出てくると、やっていて良かったと心から思います。

―臼井さんは日本で早くからスポーツ用義足に取り組まれています。きっかけは何だったのですか？

新婚旅行でハワイに行った時、現地の義肢製作所を見学し、カーボン素材のスポーツ用義足を初めて目にしました。見せてくれた職人は「これを着けると走れるんだ」と得意気で（笑）。当時日本では、「義足＝走れない」という認識が強かったのですが、カナダやアメリカではすでに専用の義足で走ることをしていた。帰国後、すぐに会社に頼んでアメリカからスポーツ用義足を取り寄せてもらい、研究しながら作り始めました。それから10年ほどたった頃に出会ったのが、後にパラアスリートとなる鈴木徹さんです。事故で脚を切断した彼に、スポーツ用義足で走り高跳びをやってみることを提案したところ、もともとの身体能力の高さもあって、翌年にはシドニーパラリンピックの舞台に立っていました。スポーツ用義足が注目されるようになったのはその頃からです。

―義足で走る会の活動も長く続けていらっしゃいますね。

走る会（スタートラインTOKYO）はもう30年近く、毎月欠かさず続けています。義肢装具士として多くの義足利用者と接しながら感じてきたのは、足をなくし、「諦めている人がとても多い」ということでした。でも「走る」というスポーツや日常生活の「基本動作」ができることで、ほんの少しでもその「諦め」の気持ちを払拭（ふっしょく）することができ、自信につながると気付いたのです。足を切断してから走れないのが当たり前だったけれど、義足を変えてもう一度走れた瞬間、うれしくて涙があふれる…そんな場面を何度も経験してきました。ですから「走れる」という可能性を与えることは、僕の義肢装具士としての責任でもあると思っています。

―来年はいよいよ東京2020パラリンピック競技大会です。この機会をどのように捉えていますか？

障害のある人がスポーツに取り組む環境を、国を挙げてサポートする契機となり、さまざまな面で好影響を生んでいると感じています。運動が健康によいのは当然ですし、スポーツを通して障害のある人が「支援される側」から「支援する側」に育っていくという効果もあると思います。また、障害のない人にとっては、パラリンピック開催が義足を知る機会にもなります。うちの会社にも小学生が社会科見学で来ますが、特に子どもたちは一度義足のことを学べば、すぐにプラスの気持ちで受け入れます。その経験は、家族や隣の人を思いやる力も育てていくと思うのです。

「150%の信頼を寄せて調整をお願いしています」と話すのは、円盤投げで来年の東京2020大会出場を目指す前田樹里選手。

―義肢装具士として35年。これから取り組んでいきたいことはありますか？

義足を作るというのは、ただ「モノ」を作るだけではありません。使う人の気持ちを引き受けるのも大切な役割です。ですので、義足という「モノ」を与えるだけではなく、「こんなことができますよ」「こんなことをしてみたらどうか」という提案までしていく義肢装具士でありたいですね。スポーツじゃなくてもいい、ファッションでも旅行でも、何でもいいので自信を持てるチャンスを、応援していくことに引き続き力を入れていきたいです。あとは若い技術者を育てていくことですね。…と言いながら、毎日24時間義足のことを考えている生活がしばらくは続きそうです。

撮影協力：義肢装具サポートセンター

「また走りたい！」をみんなで
義足ユーザーが集い、走る練習をする陸上チーム「スタートラインTOKYO」

Amputee Sports Club START LINE TOKYO

「走ることはスポーツの基本。走ることは自信につながる」と語る臼井さんが平成3年に立ち上げた同チーム。小学生からシニアまで幅広い世代が所属し、月に一度の全体練習会では毎回50名以上の参加者が仲間と共に走ることを楽しんでいます。温泉旅行やボウリング大会なども企画し、義足ユーザー同士の交流・情報交換の場としての役割も果たしています。

子どもから高齢者までみんなそれぞれのペースで活動しています。

YouTubeで配信中！

紙面には掲載していないこぼれ話や作業風景を動画で紹介しています。

すぎなみビト MOVIE

すぎなみビト「臼井二美男さん」のインタビューが動画でも楽しめます。右2次元コードからご覧いただけます。

杉並区公式チャンネル

すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。